

日本文学史における『日本靈異記』の意義

—その表現と存在—

河野 貴美子

はじめに

『日本靈異記』上巻序文は、「内経」「外書」が百濟から伝来したことから説き起こされる。まずはその序文をみる。

原夫、内経外書、伝於日本而興始代、凡有二時。皆自百濟国浮来之。輕嶋豊明宮御宇誉田天皇代、外書来之。磯城嶋金刺宮御宇欽明天皇代、内典来也。然乃学外之者誹於仏法、読内之者輕於外典。愚癡之類、懷於迷執、匪信於罪福。深智之儔、觀於内外、信恐因果。……匪呈善惡之状、何以直於曲執而定是非。巨示因果之報、何由改於惡心而修善道乎。昔漢地造冥報記、大唐国作般若験記。何唯慎乎他国伝録、弗信恐乎自土奇事。粵起自矚之、不得忍寢。居心思之、不能

默然。故聊注側聞、号曰日本国現報善惡靈異記、作上中下参卷、以流季葉。

『日本靈異記』の撰者景戒は序文冒頭でまず、「内経」と「外書」を学ぶ人が相互に誹謗し輕視し合う状況を問題として提起し、「内外」の双方に通じ「因果」を「信じ」「恐れ」る「深智」を備えるべきことを主張する（傍線部）。『日本靈異記』の撰者景戒の出自は未詳である。しかし、波線で示したように「自土」の「奇事」を集め、人々に「善惡之状」や「因果之報」を示し、「是非」を「定」め、「善道」へと導こうという試みが、「冥報記」や「般若験記」といった「他国」の「伝録」に着想を得た景戒による日本初の試みであることを考えれば、三卷百十六話からなるこの大部の書物の編纂が成し遂げられたことは、画期的な業績といつてよからう。

小論では、この『日本靈異記』という著作の日本文学史における意義について、主に以下の点から考察を行う。

まず、『日本靈異記』の表現についてである。『日本靈異記』の文章は正格な漢文とはいえず、和習漢文の代表として知られる。しかし、景戒あるいは説話筆録者が漢字漢語による漢文を用いていかに「自土」の「奇事」を記すことに苦心を重ねたかを見るならば、「内経外書」を駆使して創出されたその表現は、日本の文章表現史上、重要な意義を持つ実作の一と位置付けることができよう。

また、『日本靈異記』が有する日本文学史上の意義として、以後統々と生み出される仏教を主題とする「文学」的著作の先駆である、ということがある。例えば、『日本靈異記』が範とした『冥報記』や『般若験記(金剛般若経集験記)』はともに中国では夙に散佚してしまっている。一方日本ではこの二書が伝存し、その流れを汲んで編纂された『日本靈異記』は日本における仏教説話集の筆頭として現在に至るまで存在感を発揮し続けている。『日本靈異記』は、中国と比較した場合、日本文学史の一特徴を明瞭にする格好の資料とすることができるようと思われる。

小論では、『日本靈異記』の内部の表現を改めて読み直すとともに、『日本靈異記』がいかなる意味を持つものとして存在してきたのか、という両面から検討を進め、『日

本靈異記』を有する日本文学史の特徴を考えてみたい。

一 『日本靈異記』の表現

(1) 『日本靈異記』の試み——景戒の問題意識

始めに、『日本靈異記』の表現についてみる。『日本靈異記』の語句や文章表現においては、「内経(仏典)」「外書(外典)」をふまえたさまざま工夫を見出すことができる。

まずは、仏典の中でも、特に『妙法蓮華経』の語句を利用した表現が『日本靈異記』にはしばしば確認できる。例えば『日本靈異記』中巻第十七縁(「観音銅像反^①化鷲形^②」示^③「奇表^④縁」)で、盗人に盗まれ捨てられた観音像の銅がはがれ落ちてしまった様子を述べる「塗金褫落」という表現や、下巻第二十六縁(「強^⑤「非理」以徴^⑥債取^⑦「多倍」而現得^⑧「悪死報」縁」)で高利貸から逃れさすらう人びとの様子を「跲^⑨」と表現するのは、かなり特異な字句が用いられているようにみえるが、これらはそれぞれ『妙法蓮華経』譬喩品に「泥塗、褫落」、同信解品に「跲、辛苦^⑩」とあるのに基づき採用された記述であることは間違いないだろう。また外典の語句を用いた表現としては、例えば、上巻第八縁(「聾者帰^⑪「敬方広経典」得^⑫「報聞」兩耳」縁」)で、重い病に冒された人が「長生きをして人に厭われるよりは、いっそ善行を修めて早く死んでしまったほうがよい(「長生為^⑬

人所厭、不_レ如_二行_レ善_レ過_レ死_一」)と云う中に、「過死」という語がみえる。これは『毛詩』鄘風・相鼠に「人而無_レ礼、胡不_レ過_レ死_一」(人にして礼無くんば、胡ぞ過かに死せざる)とあるのに由来する表現である。この語句は中国の仏典においても用いられ、また平安中期の源為憲の撰になる諺集『世俗諺文』にも載ることから、日本でも好んで用いられた表現であることがわかるが、『日本靈異記』は日本におけるその先駆的な用例である。また下巻第十四縁(拍_二于_レ憶_一持_二千_レ手_レ呪_一者_上以_レ現_レ得_二惡_レ死_レ報_レ緣_一)にみえる「頭_上上_二つた_レ虱_一は黒くなる、衣_上に下_二りてきた_レ虱_一は白くなる(「衣虱上_二於_レ頭_一而成_レ黒、頭虱下_二於_レ衣_一而成_レ白)という表現は、『文選』所収の嵇康「養生論」などの中国古文獻に載る類同の表現に学んだものと思われる。以上いくつかの例からみても、『日本靈異記』が内典外典の語句表現を駆使して、いかに工夫を凝らした作文を試みているかを知ることができる。

そしてこうした『日本靈異記』の作文例をふまえて改めて序文をみると、撰者景戒の「文」に対する姿勢が伺える文言に行き当たる。例えば『日本靈異記』上巻序文には、「はじめに」に引用した部分に続いて、次のようなことがみえる。

然景戒、稟_レ性不_レ儒、濁意難_レ澄。坎井之識、久迷_二

大方_一。能巧所_レ雕、浅工加_レ力。(然るに景戒、性を稟くること儒しくあらず、濁れる意澄し難し。坎井の識、久しく大方に迷ふ。能巧の雕れる所に、浅工力を加ふ。)

「能巧所_レ雕、浅工加_レ力」の部分には、「文は才ある人によって巧みに美しく作られるべきである(が自分にはその才がない)」という、景戒の考えが表れている。文を美しく飾ることを「雕」と表現するのは、梁・劉勰『文心雕龍』の書名に代表されるように中国の伝統に基づくものであり、また空海の『文鏡秘府論』天・序にも「庶_二縑_レ素_レ好事_一之人、山野文会之士、不_レ尋_二千里_一、蛇珠自得、不_レ煩_二旁搜_一、雕_レ龍_レ可_レ期(庶はくは縑素好事の人、山野文会之士、千里を尋ねずして、蛇珠自づから得、旁搜を煩はさずして、雕龍期すべきことを)」とあるところである。

また『日本靈異記』中巻序文には、

……然景戒、稟_レ性不_レ聰、談_レ口不_レ利。神遲鈍、同_二於_レ鑄_レ刀_一、連_二居_レ字_一不_レ華。情蠢蠢、同_二於_レ刻_レ船_一、編_二造_レ文_一乱_レ句。不_レ勝_二貪_レ善_レ之_レ至_一、拙黷_二淨_レ紙_一、謬注_二口_一伝_一(然るに景戒、性を稟くること聰くあらず、口に談_レらふこと利くあらず。神の遲鈍なること、鑄の刀に同じく、字を連ね居_レては華しくあらず。情の蠢蠢なること、船を刻みしに同じく、文を編み造りては句

を乱る。善に貪るの至りに勝へず、拙く淨き紙を黷し、
謬りて口伝を注す)

とある。この「連_レ居字」不_レ華」「編_レ造文」乱_レ句」の部分にも、「字句や文は美しく連ね編み出さなければならぬものだ」という景戒の問題意識が反映しているとみることのできないだろうか。そしてこれは、『日本靈異記』が範とした書物として名を掲げる『冥報記』序文に「不_レ飾_レ文(文を飾らず)」という執筆態度が示されているのとは対照的な謂いである。

それでは、『日本靈異記』において景戒の「作文」はいかに実践されたのか。次に、上巻第二十五縁を例としてみる。

(2) 上巻第二十五縁の表現

まず、『日本靈異記』上巻第二十五縁(「忠臣小_レ欲知_レ足諸天見_レ感得_レ現報_レ示_レ奇事_レ縁」)の本文をあげる。

〈A〉故中納言從三位大神高市万侶卿者、大后天皇時忠臣也。有_レ記云、朱鳥七年壬辰二月、詔_レ諸司、当_レ三月三日、将_レ幸_レ行伊勢。宜_レ知_レ此意_レ而設備_レ焉。時中納言、恐_レ妨_レ農務、上表立_レ諫。天皇不_レ從、猶_レ将_レ幸_レ行。於_レ是脱_レ其蟬冠、擊_レ朝廷、亦重諫之。「方今農節、不_レ可_レ行也」。〈B〉或遭_レ旱災時、使_レ

塞_レ己田口、水施_レ百姓田。田施水既窮、諸天感応、龍神降_レ雨。唯澍_レ卿田、不_レ落_レ余地。堯雲更靄、舜雨還霑。〈C〉諫是忠臣之至、德義之大。〈D〉贊曰、修々神氏、幼年好_レ学。忠而有_レ仁、潔以無_レ濁。臨_レ民流_レ惠、施_レ水塞_レ田。甘雨時降、美譽長伝。

これは、大后天皇(持統天皇)の忠臣であった大神高市万侶が、農事の妨げとなる天皇の行幸を諫め〈A〉、また早の時には自分の田の水を百姓の田にそそぐようにしたところ諸天龍神の感応があり高市万侶の田にのみ雨が降った〈B〉という話である。なお〈A〉の部分は『日本書紀』に關連記事があり、また『日本靈異記』には「記」の内容を反映することが示されているが、〈C〉の「諫是……」の部分と〈D〉の「贊」は景戒、もしくは『日本靈異記』筆録者の文と考えられる。

ここで高市万侶は「忠」「義」「仁」といった儒家の徳目を体现する良臣として描かれているが、同時に本縁においては「小_レ欲知_レ足」「諸天」「龍神」といった仏典に頻出する語句もみえる。またその他にも本縁は、「内典」「外典」の字句表現を用いた作文の工夫が随所にみえる。

例えば傍線を施した「堯雲更靄、舜雨還霑」の部分についてみると、「堯雲」と「舜雨」の対は、唐・法琳『弁正論』巻四にみえる表現である。

開^二四等之日^一、遍燭^二堯雲^一。揚^三六度之風^一、橫流^二舜雨^一。(四等の日を開き、遍く堯雲を燭す。六度の風を揚げ、横に舜雨を流す。)

そして「霽」と「霈」はともに去声泰韻で「押韻」している。『日本靈異記』の文体は四字句を基本とし、手の込んだ対句表現も少なくないが、中でもこれは相当に意を用いて作られた句と思われる。というのも、「霽」「霈」字はともに中国古文獻や仏典における用例は少なくないが、しかし例えば奈良・平安初期に盛んに用いられた原本系『玉篇』には両字は掲出されていなかったようである(『篆隸万象名義』にも掲出なし)、上代文獻における用例は稀である。

なお空海の将来にかかるとされる『大乘理趣六波羅蜜多經』(貞元四年(七八八)般若訳)の音義書『大乘理趣六波羅蜜經釈文』(平安初期成立か)には經典中の「霈然」の「霈」字に対して「書中」、普蓋反。大雨也。雨多下貌也。大雨不^レ正盛降曰^レ霈也。流溢也」との反切訓詁が示されているが、ここに引かれる『書中』は『新撰字鏡』成立(八九八・九〇一)以前に日本で作られた字書(佚書)とされる。「霽」「霈」両字は『説文解字』にも載らない。「霽」字は徐鉉が後代付加した「新附」字)。当該両字を使用して対句を形成した『日本靈異記』本文がいかなる書物、知識に基づいて成されたものか、いま明らかにするこ

とはできないが、こうした例を通して『日本靈異記』の「文」の特徴や意義を重ねて追究考察していくことが可能であろう。

ちなみに空海の文には「霽」字そして「霈」字が繰り返して使用される。

飛雲幾生滅、霽々空飛揚。(飛雲幾ばくか生滅する、霽々として空しく飛揚す。)

(『遍照發揮性靈集』卷一「遊山慕仙詩」) 州司令^二法師祈^レ雨。師則上^三補陀洛山^一祈禱。応^レ時甘雨、霽、百穀豊登。(州の司法師をして雨を祈らしむ。師則ち補陀洛山に上りて祈禱す。時に応じて甘雨霽霈して、百穀豊登す。)

(同卷二「沙門勝道歴山水^一、磬^二玄珠^一碑并序」) 『日本靈異記』成立と空海の生きた時期が重なることを考えれば、「内外」の書に通じた当時一流の知識人空海の語や文と『日本靈異記』の語、文の共通点や相違点など、両者の比較研究も、日本の文学史の実相の一としてさらに進められるべきであろう。

さて、『日本靈異記』上巻第二十五縁に目を戻すと、その末尾の(D)の「贊」は、四字句に整えられ、「学」「濁」(入声覚韻)、「田」「伝」(平声先韻)と押韻も施された美文となつている。また、民に恵みを流^たえるという意の「流

「惠」の語は、『文選』曹植「与楊徳祖書」（楊徳祖に与ふる書）に、

吾雖「徳薄」、位為「蕃侯」、猶庶幾勦「力上国」、流「惠」下民、「建」永世之業、「留」金石之功（吾徳薄しと雖も、位は蕃侯為り、猶ほ庶幾はくは力を上国に勦せ、恵みを下民に流し、永世の業を建て、金石の功を留めんことを）

などとみえる語である。また、「甘雨時降」というのは、もと『爾雅』「積天にみえる語である。

甘雨時降、万物以嘉、謂「之醴泉」、祥。（甘雨時に降る、万物以て嘉とす、之を醴泉と謂ふ、祥。）

ただし「甘雨時降」の句は、唐・法琳『弁正論』卷六・九箴篇・内教為治本指五にも「善龍有力、風雨順」時。四氣和暢、甘雨時降。百穀稔豊、人民安楽（善龍力有り、風雨時に順ふ。四氣和暢にして、甘雨時に降る。百穀稔り豊かにして、人民安楽たり）とみえる。本縁においては先にみたように、「堯雲」「舜雨」の対句も『弁正論』に一致していたことを合わせ考えると、本縁の文章化において『弁正論』が参照されていた可能性も推定できるかもしれない。

このように、中国においては、本来仏教とは関わりのない中国古文献の語句表現が仏教文献に用いられていく

ことが当然ながら数多く存する。それではそうした「内典」「外典」のことばの重なりの中から、『日本靈異記』は何をどのように学び取り、その表現はいかに編み出されたのか、『日本靈異記』の文の形成については、その一の字句表現の由来、背景を通して改めて考察すべき余地が残されていると思われるわけである。

さて、大神高市麻呂の故事は、『日本書紀』の他、『万葉集』卷一・四十四歌左注にもみえ、また『懷風藻』には藤原万里の「過「神納言墟」詩も載る。しかし『日本靈異記』は、それら上代文献とはまた異なった形で表現を練り、「諒是……」に始まる評語と「賛」を附すという『日本靈異記』の型において大神高市麻呂の記事を綴り録したのであった。『日本靈異記』は上代文学の系譜の中にあり、そしてまた独自の画期を切り開いたものといえるのではなからうか。

なお、『日本靈異記』上巻第二十五縁を受け継ぐ『今昔物語集』卷二十・第四十一話（高市中納言依正直感神語）は、『日本靈異記』の文の特徴であった「諒是……」の部分と「賛」を一切削除する。『日本靈異記』説話を数多く継承する『今昔物語集』ではあるが、「記」ではなく「物語集」と称し、漢字カタカナ混じり文による述作を採用した『今昔物語集』においては、『日本靈異記』にみえる

「こだわり」の漢語漢文表現が受け継がれないことが多い。しかし、この変化（現代まで続く漢語と和語、漢文と和文の共存と乖離）こそ、「日本文学史」の一つの流れを象徴的に現すものともいえよう。

(3) 『日本靈異記』の字句表現

それでは続いて、『日本靈異記』が細部にこだわりをもつて構成した字句表現と思われる例をいくつか取りあげてみよう。

次にあげるのは、『日本靈異記』上巻第二十一縁（无_二慈心_一而馬負_二重駄_一以現得_二惡報_一縁）の冒頭部分である。

昔河内国、有_二菰販之人_一、名曰_二石別_一也。過_二馬之力_一、而負_二重荷_一。馬不_レ得_レ往時、嗔恚_二挿驅_一、負_二重荷_一勞之。
……

馬に重い荷を負わせ酷使していた石別という人物が悪報を受ける話である。その冒頭で、『日本靈異記』は、馬を鞭打ち追い使う、ということをも「挿驅」と表現している。

興福寺本訓釈は、当該字に対して「挿・打也」と記す。

『日本靈異記』には他にも「打也」という訓釈が附される字として「拍」（中巻第十七縁）、「搥」（下巻第三十三縁）等があるが、「挿」字は、『經典釈文』莊子音義・中（至楽）に「馬挿……馬杖也」とあり、また『文選』左思

「魏都賦」には「憑_レ軾挿_レ馬……」とあるように、特に「馬を打つ」ことを表現する場合に用いられるものである。ここに「挿」字を選択したことには、『日本靈異記』の用字へのこだわりや見識が垣間見える。

なお、本縁の内容を継承する『今昔物語集』巻二十・第二十九話（河内国人、殺馬得現報語）においては「挿」字の部分は「馬ヲ打テ」という一般的な用字に変化している。こうした日本語の表記史をみるうえでも、『日本靈異記』は有効な資料を多数残しているのである。

また『日本靈異記』における微細な表現へのこだわりは、次のような箇所にもみえる。

他田舎人蝦夷者、信濃国小県郡跡目里人也。……死_二經_一七日、而甦_レ告言、「使有_二四人_一、告副将往。初往_二広野_一、次有_二卒坂_一。登_二於坂上_一、觀有_二大觀_一。……」（下巻）「重斤取_二人物_一又写_二法花經_一以現得_二善惡報_一縁第廿二）

大伴連忍勝者、信濃国小県郡嬖里人也。……死_二歷_一五日乃甦_レ、語_二親屬_一言、「召使五人、共副疾往。往道頭、有_二甚峻坂_一。登_二於坂上_一、而躡躡見、有_二三大道_一。……」

（下巻）「用_二寺物_一復将_レ写_二大般若_一建_レ願以現得_二善惡報_一縁第廿三）

右にあげた『日本霊異記』下巻第二十二縁、同第二十三縁は、ともに信濃国小県郡の人が、悪行により地獄に墮ちるものの、写経の功德等により蘇る話が連続する。この二話において、あの世に至った人物はともに「急な坂を登った」と語るが、下巻第二十二縁ではそれは「卒坂」、第二十三縁では「峻坂」と書き分けられている。ちなみに真福寺本訓釈には「卒・左可之支」「峻・サカシキ」とある。

「峻坂」は仏典にもみえる語であるが、「卒坂」は仏典にはみえない。そして「卒」字に対する「さがし」の訓は『日本霊異記』以外に用例をみないものである。一方、同様の訓詁を中国古文獻に求めると、『毛詩』小雅「漸漸之石」に「漸漸之石、維其卒矣」とあり、その鄭箋には「卒者崔嵬也。謂山巔之末也」とみえる。¹⁵「崔嵬」とは、高くそびえるさまである。この訓詁をもつてただちに『日本霊異記』の作文が『毛詩』に直接起因するものとは断定できないが、先に見た「遄死」の語例と同様、『日本霊異記』には『毛詩』に由来する語句表現が散見することには注意すべきであろう。

また、『日本霊異記』における表現の工夫は、感嘆詞の書き分け、ということにも現れている。例えば『日本霊異記』には「噫乎」（上巻第九縁、中巻第二縁）、「呼矣」（上巻第十二縁）、「嗚呼」（上巻第十六縁、同第三十縁、中巻

第一縁、同第二十六縁、同第三十縁、下巻第二縁、同第三十二縁、同第三十五縁）、「嗚呼」（上巻第二十七縁、中巻第十二縁）、「噫呼」（中巻第十九縁）、「嗟呼」（下巻第二十七縁、同第三十縁）等、さまざまな感嘆詞が用いられる。これらは当然のことながら日本語の発音とは異なるものでありながら、意識して語句が選択され、書き分けられたと思われるものである。

そしてまた、左の例では、舌打ちの音を表す「咄」字（入声没韻端母¹⁷）が、人を叱る声や人に呼びかける声を表すものとして用いられている。

大徳告曰、「咄彼孌人、其汝之子、持出捨淵」。

（中巻「行基大徳携_レ子女人視_二過去怨_一令_レ投_二淵示_二異表_一縁 第卅）

彼奉_二作敬供觀音木像、呵嘖而言、「咄汝何居_二此穢地_一哉」。

（下巻「被_二觀音木像之助_一脱_二王難_一縁 第七）

驚_二彼沙門_一、叩_二室戸_一白、「咄大法師、起_二応_一聞之矣」。

（下巻「未_二作畢_一捻壻像生_二呻音_一示_二奇表_一縁 第十七）

はじめに挙げた中巻第三十縁は、行基大徳が、泣き声をあげて法会の進行を妨げる子どもを抱いた女人を責めて「その子を淵に捨てよ」という場面。次の下巻第七縁は、藤原仲麻呂の乱に連座して今にも処刑されるという人のも

とに、かつてその人が作った観音像が現れ、「なぜこのよ
うな穢れた所にいるのだ」と呵嘖する場面。最後の下巻第
十七縁は、未完成のまま放置された仏像がうめき声をあげ
ているのを聞いた沙弥が、その堂に住む沙門にそのことを
知らせようと、「起きて声を聞いて下さい」と告げる場面
である。

真福寺本『日本靈異記』に附された訳釈では、下巻第七
縁には「咄・ヤ」、下巻第十七縁には「咄・夜」とある。
「咄」字の漢字音は、日本語の「や」の発音とは異なる。
しかし「咄」字には「叱也」(玄応『一切経音義])、「呵
也」(『広韻』)などの訓話がある。右の例は、この字訓を
ふまえて、用字が正しく選択されたものといえるのではな
いだろうか。

次に、対句表現について一例をみる。『日本靈異記』各
説話の末尾に附される評語部分は、対句表現を基本とする
工夫の凝らされた文が少なくない。例えば下巻第三十四縁
(「怨病忽嬰_レ身因_レ之受_レ戒行_レ善以_レ現得_レ愈_レ病縁_レ」)は、病
に冒されながら二十八年の間、読経を重ねた女の病が遂に
癒える話であるが、その末尾には「実を知る」の語に導か
れ、四字句を基本として巧みに構成された対句が連なる。

実知、大乘神呪奇異之力、病人行者積功之徳。無縁大
悲、至感之者、播_二於異形_一。無相妙智、深信之者、

呈_二於明色_一者、其斯謂之矣。(実に知る、大乘の神呪
の奇異の力、病人行者の積功の徳なることを。無縁の
大悲は、至感の者に、異形を播_二す。無相の妙智は、深
信の者に、明色を呈すとすは、其れ斯れを謂ふなり。)

ここでは、女の病が「奇異之力」「積功之徳」「至感」
「深信」によつて癒やされたことが誉め称えられ、それら
を目指すべきことが示されるが、序文にも掲げられていた
こうした課題や目標が、字句表現を少しずつずらしながら
繰り返し述べられる点、「雕」文をもつて事を記し伝える
という、『日本靈異記』の姿勢が一書貫いて実践されて
いることがわかる。

それでは、上巻序文冒頭に掲げられた、「内典」「外典」
双方に通じる「深智」を備えるべきだという理想は、『日
本靈異記』説話においていかに反映、展開し、結着してい
るのだろうか。

(4) 『日本靈異記』の理想と目標——「智」の追求と「録」すこと
『日本靈異記』には「智者」が登場する話がある。しか
し智者は智のみをもつて無条件に称揚されてはいない。例
えば、中巻第七縁(「智者誹_二妬変化聖人_一而現至_二閻羅闕_一
受_二地獄苦_一縁」)は、「智恵第一」と称された学僧智光が、
行基に嫉妬し「天皇は私のような智人をおいてなぜ沙弥に

過ぎない行基を誉めるのか」と誹謗した罪によって地獄に墮ちるが、その後蘇った智光は行基を「聖人」として信じるようになったという話である。

釈智光者……天年聰明、智惠第一。……於是智光法師、發_レ嫉妬之心、而誹之曰、「吾是智人、行基是沙弥。何故天皇、不_レ齒_二吾智_一、唯譽_二沙弥_一而用焉」。

……從此已來、智光法師、信_二行基菩薩_一、明知_二聖人_一。

ここでは、「智」を越えるものとして「聖」という価値観が示されている。「聖人」を最上位にすえ、その下に「仁人」「智人」を並べるのは『漢書』古今人表にもみえる序列であるが、『日本靈異記』には「聖」なることを称える表現が散見される（上巻第四縁「聖人知_レ聖、凡夫不知_レ（聖人は聖を知り、凡夫は知らず）」等）。

また、『日本靈異記』下巻第十九縁（産生肉団之作女子修_レ善化_二人縁_一）は、肉団から産まれた尼が、法師との偈を用いた問答に勝ち、高名な「智者」の試問にも屈しなかったという話であるが、『日本靈異記』はこの尼を「聖化」と記し、通常の「智者」を越える存在を表すものとして「聖」という表現を用いている。

尼……因拳_レ偈問之、講師不_レ得_二偈通_一。諸高名智者、怪之一向問試、尼終不_レ屈。乃知_二聖化_一、而更立_レ名、

号_二舍利菩薩_一。……

しかし同時に景戒は、「智者」たることを下巻に至るまで一貫して理想として掲げている。下巻序文や下巻第三十八縁においては、「天台智者」（や「陰陽術」）にも学ぶべきということが新たな課題として示される。

羊僧景戒、所_レ学者、未_レ得_二天台智者之間術_一。所_レ悟者、未_レ得_二神人弁者之答術_一。（下巻序文）

然景戒、未_レ推_二軒轅黄帝之陰陽術_一。未_レ得_二天台智者之甚深解_一。

（下巻「災与_レ善表相先現而後其災善答被縁 第卅八」）
そして興味深いのは、「深智」を理想として幕を開けた『日本靈異記』が、下巻最終話に、「智」と「行」を兼ね備えた善珠や寂仙という禪師が、それぞれ「人王之子」や「賀美能天皇（嵯峨天皇）」に転生する話を置き、嵯峨天皇を「聖君」と称えて結ばれることである。『日本靈異記』は、「学」び、かつ「行」を「修」めることによって、「聖」へと昇華しうる「智」を語ることに於いて首尾呼応した「作品」となっているのである。

釈善珠禪師者……智行双有。……是故当知、善珠大徳、重得_二人身_一、生_二人王之子_一矣。……又伊与国神野郡部内有_レ山……彼山有_二淨行禪師_一而修行。其名爲_二寂仙菩薩_一。……寂仙禪師、臨_二命終日_一、而留_二録文_一、

授_二弟子_一告之而言、「自_二我命終_一以後、歴_二廿八年_一之間、生_二於國王之子_一、名爲_二神野_一。是以當知我寂仙」云々。然歴_二廿八年_一、而平安宮治_二天下_一。山部天皇御世、延暦五年歲次_二丙寅_一年、則生_二於山部天皇皇子_一、其名爲_二神野親王_一。今平安宮疏_二十四季_一治_二天下_一。賀美能天皇是也。是以定知、此聖君也。

〔下卷〕智行並具禪師重得_二人身_一生_二國皇之子_一縁_二第卅九_一〕

またもう一点、この最終話からは、「記し伝える」ことに対する使命感というものも、『日本靈異記』に一貫することがわかる。右の転生の話は、禪師の臨終に際しての言葉が「文」として「留」め「録」されたものによつて伝えられたことが記される（波線部）。そして『日本靈異記』末尾の跋文にも「靈奇」を「録」ということに特に言及される。

我從_レ所_レ聞、選_二口伝_一、儻_二善慥_一、録_二靈奇_一。

ここで思い合わせられるのは、景戒自身の経験を記した下巻第三十八縁である。

又僧景戒夢見事……景戒身死之時、積_二薪燒_一死身。

……爰景戒之神識、出_レ声而叫。有_レ側人耳、当_レ口而叫、教_二語遺言_一、彼語言音、空不_レ所_レ聞者、彼人不_レ答。爰景戒惟忖、死人之神者無_レ音故、我叫語之音不

聞也。

自らの遺体が焼かれる夢を見た景戒は、死後の魂（神識）が何かを叫んでも、その声は人には聞こえない、ということを知る。死んでしまつては、ことばを伝えることはできない。景戒が、できごとを記し、ことばを文字として書き残し伝えようとした強い動機は、まさにこの夢の経験にもあつたのではなからうか。

二 日本文学史における『日本靈異記』の存在

以上ここまでは、『日本靈異記』内部の表現に注目し、「内経」「外書」双方の語句表現を駆使した作文の実際や、工夫された漢語漢文表現の積み重ねによつて編者の目標や理想を表現することがいかに達成されているのかをみてきた。

さて、『日本靈異記』は、日本最初の仏教説話集として、著作の存在そのものが日本文学史における重要な意義を有するものとして位置付けられてきた。それでは、『日本靈異記』という著作の型、枠、スタイルはいかにして創出されたものであるのか、以下そのことを、先行する中国の著作との関係から改めて考えるところに、『日本靈異記』を日本仏教説話集の祖と位置付けるに至つた『日本靈異記』の享受史を通して、『日本靈異記』という著作の存在意義

および日本文学史の特質についても検討していきたい。

(1) 『冥報記』『金剛般若経集験記』と『日本靈異記』

はじめにもみたように、『日本靈異記』は上巻序文において、「冥報記」と「般若験記」という唐の新しい書物と出会った景戒によって、これに類する書物の制作が意図された結果生み出されたものであることが明確に記されている。日本における初の試みであり、これは紛れもなく日本文学史上の大きな「事件」であったといえる。

ここで改めて、『冥報記』と『金剛般若経集験記』を引き継ぐ、ということがいかなる意味を持つことなのか、考えてみたい。

まず『冥報記』は、唐・永徽四年（六五三）頃に成立した著作で、『旧唐書』に載る撰者唐臨の本伝には、『冥報記』は大いに世に行われた（「所撰冥報記二卷、大行于世」）、とある。『冥報記』序文には、六朝以来陸統と生み出された「応験記」類が「善悪」を明らかにし「将来」を「勸戒」するものであり、その「風旨」を慕った唐臨が「聞く所を録し」て撰述したのが『冥報記』であると述べられている。

……昔晋高士謝敷、宋尚書令傅亮、太子中書舍人張演、齊司徒事中郎陸果、或一時令望、或当代名家。並録

觀世音應験記、及齊竟陵王蕭子良作宣験記、王琰作真祥記。皆所以微明善惡、勸戒將來、實使聞者深心感寤。臨、既慕其風旨、亦思勸人、輒録所聞、集為此記。

（『冥報記』序文）

一方の『金剛般若経集験記』は、唐・孟獻忠の撰（開元六年（七一八）成立）。その中には蕭瑀『金剛般若経靈験記』、郎餘令『冥報拾遺』、そして唐臨『冥報記』からの引用も含まれている。

『冥報記』と『金剛般若経集験記』は、六朝から唐代にかけて盛んに作られた、仏教応験記類の流れを継ぐものである。その流れをキャッチした景戒によって、海を越えた日本においても類同の著作が作成されたことは、東アジアの文学・文化史からみても大きな意味を有するものといえる。

また、『冥報記』は『旧唐書』経籍志においては「乙部史録雜伝類」に著録されるものの、『新唐書』芸文志に至ると「乙部史録雜伝記類」と「丙部子録小説家類」の双方に著録されるといふ興味深い現象を引き起こす。これは、中国の書物の世界において六朝から隋唐にかけてにわかに増加した、『冥報記』のごとき応験記類あるいは伝奇類に對して、それら全てを「史」の書として位置付けることが難しくなり、「小説」というカテゴリーにおいてそれらを

捉え、括り直そうという認識の変化が生じたことを反映するものといえる。

そしてそれは、『日本靈異記』が『日本書紀』や『続日本紀』の記事とも関わり、時代順に記事を並べるという「史書」のごとき性格を持ちながらも、「説話」の祖と位置付けられていくことにも重なる点、日本の説話の起源と形成を考える上でも示唆的な手がかりとなる情報である。

しかしいま、さらに注意したいのは、『冥報記』にせよ、『金剛般若経集験記』にせよ、それらはいずれも中国文学史においては決して「主流」ではなかったことである。

『冥報記』は、『法苑珠林』（唐・道世撰）や『太平広記』（北宋・李昉等撰）に引用がある。しかし『冥報記』『金剛般若経集験記』の二書はいずれも夙に亡佚し、中国の書物の体系からその存在は消え失せた。特に『金剛般若経集験記』は他書への引用もなく、目録への著録すら確認できないものである。¹⁹⁾

なお、中国においては顧みられることなくなくなった書物が、日本においては独自に影響力を持つということは、『冥報記』『金剛般若経集験記』に限ったことではない。

例えば、『枕草子』『文は』の段に「文は、文集。文選。新賦。史記、五帝本紀。願文。表。博士の申文」とあるが、前半に挙げられた漢籍（『文集』『文選』『史記』）は、日本

における漢籍受容の「偏向」を示すものともいえる。特に、白居易という個人の別集にすぎない『白氏文集』が他の数多の書物をさしおいてトップの位置に据えられていることは、中国においては考えられない選択であり、日本独自の特徴的な状況を示すものといつてよい。²⁰⁾ また、皇侃の『論語義疏』、『古文孝経』から『孝子伝』、『遊仙窟』に至るまで、日本において特に好んで読まれ、結果として日本にのみ残る佚存書となったものは少なくない。

『冥報記』と『金剛般若経集験記』の刺激によって『日本靈異記』が誕生したこと、そしてまた、『日本靈異記』を引用する著作がその後も相継ぎ（『三宝絵』『扶桑略記』等）、あるいはまたそれに類する「説話集」が編纂され（『今昔物語集』等）、日本文学史において一群を成す存在となったことを考えれば、景戒の選択と行動は、中国の文献に端を発しつつも、中国の文献世界とは異なる日本の「文学世界」を構築する起点を作りあげたわけであり、『日本靈異記』の存在は、日本文学史を形成する重要な役割を果たしたものであることが改めて鮮明となる。

なお、仏教応験記類が日本において文学史を飾る重要な存在となった理由はさまざまに考察できようが、一つには『日本靈異記』上巻序文冒頭にあったように、日本の文化・文学史は、その初発の時点から「内経」と「外書」の

双方に支えられるものであったことに大きく起因すると思われる。例えば聖徳太子は、「内教」を高麗僧慧慈に習い、「外典」を博士覺哥に学んだとされる。以来日本においては、「内外兼修」が一つの伝統（学知のスタイル）となつたのではないか。興味深いのは、鎌倉前期の『和漢朗詠集』注釈書である東北大学本『和漢朗詠註抄』の序に、

原 夫内外経書、伝日本一皆從百濟一將來之也。

……厥後学外一之者誦於仏法一、読内一之者軽於外典一。
於斯集一者内外共一挙、顯其精要一、玉石相混互不是非

と、内典外典を共に学ぶべきだとする『日本靈異記』序文のことが繰り返されていることである。古代日本の言説は、「内経」と「外書」の両者からエッセンスを吸収して豊かさを増していったものであり、「文」学に通じるためには、その双方にわたる知識と理解が必要だという認識は、このほかの著作にもしばしばみえる。

それでは最後に、日本の文学、文化の歴史において『日本靈異記』がどのように位置付けられてきたのかということとを、「目録」類から辿ってみよう。

(2) 「目録」類からみる『日本靈異記』の存在

『日本靈異記』は、日本仏教説話集の嚆矢とされ、日本文学史においては一連の仏教説話集が一群のものとして生

み出され存在してきたかのように捉えられがちである。しかし、いうまでもなく「仏教説話」という枠組み、概念は、後から与えられたものに過ぎず、『日本靈異記』成立以後の前近代の歴史において、『日本靈異記』あるいは後続の「説話集」と称される書物がどのようなものと位置付けられてきたのかは、必ずしも明確ではない。

中国においては『漢書』芸文志以来目録が存し、目録への著録のされ方、あるいは著録の有無等によって、各著作の存在や位置付けを知る指針となっている。ちなみに、中国の目録において大量の仏書をいかに扱ひ位置付けるかということは古来の難問であり、また『金剛般若経集験記』や『遊仙窟』のように目録に著録すらされない書物も多数あったわけで、目録が古代の書物の状況を知る上で必ずしも万能というわけではない。しかし一方、前近代の日本においては、日本の書物を総合的に扱う目録類そのものが多くは存在しないということが大きな相違点としてある。書物の歴史において、あるいは学術文化世界全体において、各著作がいかなる意味をもって生み出され、享受されたのかを俯瞰する資料に乏しいのである。

しかし、ともかく、中世から近世にかけての「目録」類の部門の分け方と、それらにおける『日本靈異記』の著録状況を改めて眺めてみることにする。

▽『本朝書籍目録』（一二七七〜九四年頃成立?）

神事／帝紀／公事／政要／氏族／地理／類聚／字類／詩家／雜抄／和歌／和漢／管絃／医書／陰陽／人々伝／官位／雑々／雜抄／仮名

※「雜抄」に「日本靈異記三卷」と著録

▽藤原貞幹『国朝書目』（寛政三年（二七九二）刊）

正史／編年／雜史／御撰書／日次記／政事／礼儀／官位／氏族／人伝／天文／地理／殿舎／鋪設／衣服／飲食／勸誠／故実／類聚／字書／臨池／画図／管絃／医藥／鷹鷄／蹴鞠／薰香／神祇上／神祇下／仏事／仏利旧文／雜書／文集／詩集／詩文別集／詩文雜書／和歌／連歌／物語

語

※「雜書」に「日本靈異記一卷」と著録

▽尾崎雅嘉『群書一覽』（享和二年（二八〇二）刊）

国史類／神書類／雜史類／記録類／有識類／氏族類／字書類／往来類／法帖類／物語類／草子類／日記類／和文類／記行類／撰集類／私撰類／家集類／歌合類／百首類／千首類／類題類／和歌雜類／撰歌類／歌学類／詩文類／医書類／教訓類／釈書類／管絃類／地理類／名所類／隨筆類／雜書類／群書類從

※「釈書類」に「日本靈異記 写本 三卷 沙門景戒」と著録

▽塙保己一編『群書類從』（文政二年（一八一九）版）

神祇部／帝王部／補任部／系譜部／伝部／官職部／律令部／公事部／装束部／文筆部／消息部／和歌部／連歌部／物語部／日記部／紀行部／管絃部／蹴鞠部／鷹部／遊戯部／飲食部／合戦部／武家部／釈家部／雜部

※「雜部」に狩谷掖斎『校本日本靈異記』を収める

右にあげた目録類において『日本靈異記』は、「雜抄」「雜書」「釈書」といったカテゴリーの間を行き来している。そしてこれらにおいては「説話」という枠組みはまだ見えていない。

ここで注目したいのは狩谷掖斎（一七七五〜一八三五）による『日本靈異記』研究である。『群書類從』雜部に収められた『校本日本靈異記』は、研究対象としての『日本靈異記』の意義を近代以降の学界にも伝え知らしめるものとして重要な成果であったといえる。それではなぜ狩谷掖斎は『日本靈異記』研究に取り組んだのか。

▽狩谷掖斎『校本日本靈異記』跋（文化十三年（一八一六））

此書立言雖出浮屠氏而文辭古樸可喜。又間有糾史之謬及証明他書、則古書之最善者也。……又參以扶桑略記、法華驗記、今昔物語諸書補正諒脫。

右の跋によれば、狩谷掖斎を『日本靈異記』研究に向かわせたのは、『日本靈異記』の「文学性」や説話への興味ということではなく、古代の「文辞」を残し、また「史之謬」を正し「他書」を「証明」しうる、考証のための資料としての魅力によるものであったようである。しかし、狩谷掖斎が『日本靈異記』の本文を校訂し、考証するにあたって、「扶桑略記」「法華験記」そして「今昔物語」等の諸書を用いて校勘を行ったことは、日本の書物史、言語文化史において、『日本靈異記』を起点とする（『説話文学』という）一つの群、ラインが存することを浮かび上がらせるものとなったのではなからうか。

おわりに

二十世紀に入り、『日本靈異記』は、板橋倫行『日本靈異記』（春陽堂、一九二九年五月）、武田祐吉編『校本日本靈異記』（明世堂書店、一九四三年七月）等を経て、新旧の日本古典文学大系（岩波書店）、日本古典文学全集（小学館）、新潮日本古典集成（新潮社）のいずれにも、「日本古典文学」の一としてもれなく取り込まれることとなった。そして、「日本古典文学」としての『日本靈異記』研究は数多くの成果を生み、また、訓点語・国語学の研究対象としても『日本靈異記』はその存在意義を大いに發揮してき

た。また近年は、歴史研究の立場から『日本靈異記』を読み直す成果も公刊されている。そしてもちろん、仏教学からのアプローチも数多く蓄積されてきた。それでは『日本靈異記』は果たして「文学」なのか否か、あるいは「歴史」や「仏教」なのか否か、と問うとき、それに答えるのはいづれも容易ではない。

哲・史・文を柱とする近代以後の人文科学研究は、『日本靈異記』を対象とする研究においてもさまざま成果をあげてきたことは疑いない。しかし、哲・史・文に分化された近代人文科学の枠組みのみからでは、『日本靈異記』を成立せしめた環境やその存在意義の総体を十分に説明することはできないのではないだろうか。特に、前近代と、近代以降の、「文」あるいは「文学」の概念やあり方の転換を考えるならば、「日本文学史における『日本靈異記』の意義」を追究するには、「日本文学史」とは何か、そもそも「文学」とは何か、を繰り返し自覚的に、また総合的に問い直すことが合わせて必要となるう。

小論において、『日本靈異記』がいかなる言語表現によって、いかなる主張を発信しようとしていたのか、また、その着想や書物成立の背景、あるいは享受史を改めて振り返ってみたのは、『日本靈異記』とは何か、また、『日本靈異記』を生み出し、伝え残してきた日本の「文学史」とは

いかなるものであったのかということ、右のような問題意識から捉え直してみたいと考えてのことであった。

『日本靈異記』は、漢語・漢文、漢籍、そして仏教と複雑に関わりながら生み出されてきた日本の「文学」を考えうるうえで、さまざまなメッセージを伝えてくれる著作といえる。そして『日本靈異記』は、日本文学史の形成や、文学とは何かという、より大きな問題を追究することにもつながる、多くの手がかりを含み残しているものである。

主な使用テキスト

『日本靈異記』の本文は新編日本古典文学全集を用いた。なお日本古典文学大系、新日本古典文学大系の校異、訓読等を参照し適宜改めたところがある。その他の使用テキストは以下の通り。『冥報記』：『冥報記の研究』（勉誠出版）。『文鏡秘府論』：『弘法大師空海全集』（筑摩書房）。『通照発揮性靈集』：『定本弘法大師全集』（密教文化研究所）。『文選』：胡克家本『文選』（芸文印書館）。『弁正論』：大正新脩大藏経。『爾雅』：重栞宋本爾雅注疏附校勘記。『和漢朗詠註抄』：『和漢朗詠集古注釈集成』第一卷（大学堂書店）。『本朝書籍目録』：『本朝書籍目録考証』（明治書院）。『国朝書目』：『覆刻日本古典全集（現代思潮社）』。『群書一覽』：『定本群書一覽』（ゆまに書房）。『校本日本靈異記』：『覆刻日本古典全集』。

注

- (1) 『日本靈異記』における当該の問題意識については増尾伸一郎「今の時の深く智れる人——景戒の三教観をめぐって——」（小峯和明・篠川賢編『日本靈異記を読む』吉川弘文館、二〇〇四年一月）等も参照。
- (2) 河野貴美子「古代日本の仏教説話と内典・外典——『日本靈異記』を中心に」（新川登亀男編『仏教文明の転回と表現 文字・言語・造形と思想』勉誠出版、二〇一五年三月）参照。
- (3) 浅野敏彦「日本靈異記の漢字と言葉——法華経・一切経音義との比較を通して——」（坂本信幸他編『論集 古代の歌と説話』和泉書院、一九九〇年十一月）参照。
- (4) 現在通行の『妙法蓮華経』信解品は「踏躡」ではなく「伶俚」に作るが、玄応『一切経音義』卷六・妙法蓮華経・信解品音義には「伶俚……経文多作踏躡」との指摘があり、敦煌出土の写本には実際に当該部分を「踏躡」に作るものがある（甘博〇七五）。注2前掲河野貴美子論文参照。
- (5) 注2前掲河野貴美子論文、また同『日本靈異記』を生み出した「語」学と「文」学（『文学・語学』二〇五、二〇一三年三月）も参照。
- (6) 道宣『集古今仏道論衡』に「人之無レ良、胡不ニ過死ニ」とある。大正蔵第五十二卷三九二頁a参照。
- (7) 『文選』嵇康「養生論」に「虱処レ頭而黒、麝食レ柏而

香」とあり、その李善注には「抱朴子曰、今頭虱著レ身、皆稍變而白、身虱処レ頭、皆漸化而黒」とある。

- (8) 『日本書紀』持統六年二月丁未条、同乙卯条、同三月戊辰条。

- (9) 注2前掲河野貴美子論文参照。

- (10) 「霈沢」の語は『続日本紀』に三例（宝龜四年十二月乙未条等）確認できる。

- (11) 神田喜一郎『優鉢羅室叢書 大乘理趣六波羅蜜經釈文』上田正解説（一九七二年三月）参照。

- (12) 李善注には「四子講徳論曰、質敏以流レ恵」とある。なお「与ニ楊徳祖一書」の当該部分は『三國志』魏書・陳思王植伝にも同文がある。

- (13) 『根本説一切有部毘奈耶』（大正藏第二十三卷七六五頁b）等。

- (14) 築島裕『訓点語彙集成』第三卷（汲古書院、二〇〇七年十一月）参照。

- (15) 狩谷掖斎『日本靈異記攷証』参照。
例えば『日本靈異記』下巻序文の「言われ」、「言みみきてをしかる提」などの語。注5前掲河野貴美子論文二〇一三参照。

- (17) 李珍華・周長楫編撰『漢字古今音表』修訂本（中華書局、一九九九年一月）参照。

- (18) 『漢書』古今人表「上上…聖人、上中…仁人、上下…智人、下下…愚人。」

- (19) 『冥報記』『金剛般若經集驗記』はともに日本にのみ伝存する佚存書である。『冥報記』は高山寺藏本、前田育

徳会尊経閣文庫藏本、知恩院藏本、『金剛般若經集驗記』は石山寺藏本、黒板勝美氏旧藏天理大学藏本、高山寺旧藏奈良国立博物館藏本といった古写本が残る。

- (20) 河野貴美子「文」とリテラシーの基礎」（河野貴美子・Wiecke DENECKE・新川登亀男・陣野英則編『日本「文」学史 第一冊「文」の環境——「文学」以前』勉誠出版、二〇一五年九月）参照。

- (21) 『日本書紀』推古元年四月己卯条。

- (22) 本郷真紹監修、山本崇編『考証日本靈異記』上（法蔵館、二〇一五年三月）等。